

研究ノート：『響きと怒り』研究における南部と身体 ——身体表象の可能性をめぐって

杉浦 牧

序——『響きと怒り』における身体

本稿は、ウィリアム・フォークナー『響きと怒り』（1929）における研究史を概観し、小説に現れる身体表象に対する総合的な分析に向けた展望を記すものである。ここではひとまず、『響きと怒り』における身体表象の意義を確認しておきたい。

アメリカ文学におけるモダニズムの歴史的達成、そしてウィリアム・フォークナーの作品群の中でも最初の傑作として名高い『響きと怒り』を論じる際に多くの場合焦点にされるのは、コンプソン家の没落に代表される南部社会の変化を巡る意識の問題か、複数の断片化された視点や「意識の流れ」といったモダニズム的手法に対する分析であると言えるだろう。ここで、モダニズムの手法によって失われゆく南部の家族をロマンティックに描き出すという試みの中で、フォークナーがベンジー、クエンティン、ジェイソンといった語り手の身体感覚を特徴的に叙述へと取り入れていることは興味深いように思われる。それは安定した社会秩序が失われ、断片から普遍性を再構築しようとするモダニズムの手法において前景化されるのが、『響きと怒り』においては「身体」であるということだ。それはどこかで、フォークナーが南部社会という地域の特殊性と物語的普遍性とを接続する叙述の鍵として身体を捉えていたということを示しているのではないか。逆に言えば、小説に現れる個人の身体には、抽象的な概念に留まらない痕跡として、土地や社会が宿っているのではないか。そして身体という側面から改めて小説を捉え直すことで、南部社会あるいは歴史、家族といった問題系を身体に投射されるものとして逆照射し、地域の特殊性と身体の関係性を巡るパースペクティブを更新することができるのではないか。本稿はこうした問題意識から出発する。本稿では『響きと怒り』の研究史を確認しつつ、その中に形成される問題系において身体表象という問題がどのような位置を取りうるかを見定めることを目指す。『響きと怒り』という小説には、手法的な意識においてであれ、「現実」の象徴としてであれ、常に身体というものが介在している。こうした知覚と身体の問題を、これまでの研究はどのように扱ってきたのか。

本稿の問題意識を明確化する上で、舌津智之「嗅覚の彼岸——『響きと怒り』における欲望と身体」（2014）を参照しておきたい。これは『響きと怒り』における身体感覚、とくに「嗅覚」の意義を問題化したものである。そこで定義される嗅覚とは、対象との

距離を前提にしながらもそれを侵犯するものであり、ちょうど触覚と視覚との狭間に存在する。それゆえに、嗅覚は「欲望」や「不可避の運命」といったものの親和性が高い。舌津は、こうした嗅覚に鋭敏なキャラクターとしてクエンティンとベンジーを、そして兄弟の中で唯一「触覚」による充足を知るキャラクターとしてジェイソンを指摘し、小説を「嗅覚のロマンティシズムと触覚のリアリズム」(35)の併存によって引き裂かれたものとして捉えた。こうした具体的な身体感覚の分析とその意義の検討を、南部社会のイデオロギーとの関連から小説全体に対して適応するという方向性が、本稿の展望する研究の方法論となる。

ここで、本稿が主題にしている「身体」という枠組みの輪郭を明確にしておこう。一口に「身体」という言葉で包括しているが、ここでは主に二つの側面に分けることができる。一つはナラティヴの道具としての知覚、もう一つはその物質性の表象という問題である。この小説において知覚を論じることは、三人の兄弟それぞれのナラティヴ分析と不可分の問題として焦点化される。主体性などほとんどなく、ただ一群の知覚の束のようになったベンジーのナラティヴをはじめとして、小説内で描写される知覚は様々な種類に及んでいる。ナラティヴ分析を基本的なアプローチとする批評は、知覚を言語化することの意味という問題へと向かっている。一方で、身体の物質性とは、身体の震え、うめき、泣くことといった生理現象に見られる、主体の心理と連動しつつも完全にはコントロールできない現象として特徴づけることができる。こうした現象として、この小説では特に女性の身体において顕在化し、小説の中心をなす妊娠や性行為なども数えることができる。『響きと怒り』において最も目を引くのは、小説の冒頭からゴルフをする紳士たちが発する「キャディ」の声に反応して泣き出すベンジー(16)によって印象付けられるような身体の反応だろう。ベンジーのナラティヴにおいてはそうした身体反応は語られることさえなく、周囲の反応によってやっと分かるものだったりする。あるいはキャディの妊娠に象徴される女性の身体性を抑圧することが、クエンティンをはじめとする語り手たちの意識における中心的なファクターとして存在している。この小説において女性の身体性は過分に外傷的なものであり、語り手のコンプソン兄弟をはじめとする男性主体は、それらを(抽象化とともに)排除しようともがく。これは広く南部社会において顕在化する問題でもある、と言えるだろう。女性や黒人の身体性は、南部社会のイデオロギーにおいて、「不純なもの」や「暴力的なもの」としてステレオタイプ化され、管理や攻撃の対象となってきたからである。というよりもむしろ、南部白人男性社会のイデオロギーはこうした「不純な」身体性の排除の上に成り立っているとすら言ってよいだろう。フォークナーにおける南部社会と身体性にまつわる問題について田中敬子は『フォークナーの前期作品研究——身体と言語』(2002)の中で、「フォークナーの理解する南部は、つねに身体にこだわりながらも異質な身体の接近を恐れ、執拗に言語による神話化や排除を行い、境界不可侵のアイデンティティを形成する」(7)とまとめている。そうした排除の構造は、『響きと怒り』においても、キャディやコンプソン夫人やディルシーに対する扱いを巡って顕在化しているし、フォークナー自身が

キャディやディルシーにそれぞれ並々ならぬ愛着を示し、様々に理想化された形で小説内に登場させたのも、やはりある種のイデオロギーの裏返しであると言える。

身体とは、時に言語や精神に従属するものとして、時に言語や精神が包摂できないものとして姿を現す。そうした身体観は、ある種の否定に裏付けられていると言ってよい。精神でないもの、言語でないものとしてしか、身体は扱われてこなかったのだ。ここで、改めて身体に焦点を当てることにより、アメリカ南部が背負う精神といったある意味で形而上的な問題を批判的に再検討することが可能になるのではないだろうか。

1. 「現実」とナラティヴ——『響きと怒り』初期批評における問題

『響きと怒り』における「時間」について言及したサルトルの有名なエッセイ（1939）をはじめとするフランスの実存主義者たちによる受容や、出版後間もない段階での小説に対する同時代的なコメントを経て¹、この小説に対する本格的な分析は戦後から表れ始める。それまでの批評がおおよそ南部における旧階級の没落と新階級の台頭という社会的変化を小説に読み取るものだったことを受けて、おおよそ二次大戦以降の批評において問題にされるのは、何よりもまず小説の構造それ自体である。特に小説の各章におけるきわめて特徴的な語りに対し、その構造および効果の解明が目指されることとなる。そうした方向性の下で小説全体を論じた研究の代表的なものとして、四つのセクションを取り上げ、その方法や効果およびそれぞれの関係性について詳細に分析した Olga W. Vickery の “*The Sound and the Fury: A Study in Perspective*” における議論（1954）があげられる。彼女はこの小説における各セクションを読み進んでいくことが読者にもたらす効果を “a gradual procession from the completely closed and private world of the first section to the completely public world of the fourth”（1019）と整理した上で、各セクションを詳細に分析している。それぞれのパースペクティブに対する分析の焦点として浮かび上がる問題は「現実」あるいは「真実」と叙述との関係をめぐるものである。小説における四つのナラティヴは、同じ一つの出来事を、「真実であり真実の完全な歪曲でもある」（1018）ものとして提示している。特にキャディの存在はベンジーにとって「木の匂い」であり、クエンティンにとっては「名誉」であり、ジェイソンにとっては「金か、少なくとも金を得る手段」である（1018）。これは、それぞれのナラティヴが何を現実として認めるか、あるいは何を現実でないものとして退けるかという判断が、ナラティヴを駆動する重要な要件となっていることを傍証する。ここで指摘しておきたいのは、この分析においてすでに、それぞれの知覚とそれが形成するナラティヴは性質が分けられている、ということだ。Vickery はクエンティンの世界がベンジーの世界と比べて、“abstraction rather than sensations”（1019）によって秩序付けられている、と述べている。クエンティンが嗅ぎ取るスイカズラの匂いを指して彼女は次のように言う——“Yet honeysuckle is only a sensation, just as Caddy’s affair with Ames is simply a natural event. It is Quentin who makes of the one a

symbol of ‘night and unrest’ and the other forgivable sin” (1029)。スイカズラの花が彼にとって“symbol of defeat”となるのだとしても、それを意味づけているのはクエンティンである。そしてジェイソンについては“Jason had learned to believe in whatever he could hold in his hands” (1032-33) と述べられている。ここでの総評に沿って、三人の兄弟のナラティヴを特徴付けるならば、ベンジーは純粋な知覚、クエンティンは象徴化、ジェイソンはリアリズム的ナラティヴ、として整理することができる。これは以降の批評においても分析の根本をなす捉え方だと言ってよいだろう。

小説の構造それ自体を問題にする批評はその後、フォークナーの草稿研究の進展とも相まって、作家論的アプローチからフォークナーの小説世界全体との関連性の中での包括的な位置づけの動きとして60年代へと引き継がれていく。代表的なのはCleanth Brooks, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (1963) や Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (1966) であろう。Brooks は、旧南部の没落の物語として読まれてきたこの小説を、家族の解体についての物語として読み直すという方向性の下で、この小説を構成する四つの章の特徴やそれらが織り成す構造を詳細に分析している。Brooks は四つのナラティヴを、次第に客観的世界へと向かっていくものとして整理した(325)上で、焦点化される三人の兄弟及びディルシーの造形や内面について分析する。Millgate は、草稿と照らし合わせることで作品の成立過程を検討することから始め、父ジェイソン・コンプソンの存在感の増大(95)など、改稿作業が持った意味を分析する。その上で四つのナラティヴの特徴を分析する。ベンジーの「カメラ」に例えられる目やキャディに「声」が与えられなかったことの必然性についてなど、重要な論点は多く提出されている。

こうした段階での研究における関心は基本的に、言語と「現実」との関係に貫かれている。分析の上で焦点化される「目」や「声」や「匂い」といった知覚は、単にナラティヴを構成する要素として捉えられており、現実に対して主体が参入するための媒体としての意味合いが強いと言えるだろう。受容理論の提唱者としても名高い Wolfgang Iser は *The implied Reader: Patterns of Communication in Prose Fiction* (1974) において『響きと怒り』を取り上げており、主観性が制限される様式、という視点から三人のナラティヴを分類してみせている。メルロ＝ポンティの身体および時間に関する議論なども参照しつつ彼は、ベンジーを「知覚」、クエンティンを「意識」、ジェイソンを「行為と支配」に限定された主観性というように分類しており(151-52)、それらを読み進むことが読者の期待や緊張にどのように作用するかを分析している。こうした分析と理論化は、上記批評における問題の枠組みに則る形で行われており、ある意味で『響きと怒り』読解における基礎的な態度は、このあたりの時点でおおよそ完成されていたと言ってよいだろう。

2. 不在の中心、表象不可能性

以上のようにして、全体の構造およびそれぞれの章の分析がなされた後で、『響きと怒り』に対する批評は新たな展開を迎えていくこととなる。70年代以降、精神分析や脱構築批評の高まりを受けて、そうした理論的枠組みの影響下でフォークナー作品および『響きと怒り』を論じたものが現れてくるのである。精神分析を基本とするアプローチからこの小説を論じ、大きな影響力を持った批評としては John T. Irwin, *Doubling and Incest/ Repetition and Revenge* (1975) や André Bleikasten, *The Most Splendid Failure: Faulkner's The Sound and the Fury* (1976) などがあげられる。Irwin は『アブサロム、アブサロム!』などと対照させながら、それらとの関連の中でテーマ批評的に『響きと怒り』を論じている。ここでは作家あるいは芸術家としてのフォークナーが自己の分身を生む行為として小説の執筆が捉えられており、父と子の確執や近親相姦という中心的なテーマが『響きと怒り』から『アブサロム、アブサロム!』へとまたがるフォークナーの小説世界において作家自身の“doubling”として繰り返され続けていくことが指摘されている (159)。そして Irwin は“virgin space”というものは失われているのだと説く父コンプソン氏の言葉などを引きつつ、そうしたフォークナーの果てない再現を突き動かすモチベーションとして、“a loss, a separation a cutting off, a self-castration”という感覚を指摘している (171)。

Bleikasten の *The Most Splendid Failure: Faulkner's The Sound and the Fury* は精神分析を経由したアプローチから総合的に『響きと怒り』全体を論じた詳細な作品論である。ここにおいて提出された諸々の議論は現在でもなおその批評的有效性を十分に保持しているが、最も影響を与えているのは、キャディを小説における「不在の中心」として捉えた議論だろう——“Caddy is exposed as a fiction within the fiction, her presence in the novel being rendered in such a way as to make her appear throughout as a pure figure of absence” (36)。あるいは、本稿の文脈においてとくに重要と思われるのはベンジーの世界認識についての有名なコメントなどである——“There is no central I through whose agency his speech might be ordered and made meaningful; in like manner, there is no sense of identity to make his experience his” (71)。

こうしたアプローチの充実を経て、『響きと怒り』の中心にあるキャディの批評的重要性は、トラウマティックな「不在の中心」としてその輪郭を与えられるようになってゆく。そしてここに見出される、言語化不可能で、表象がその周辺を迂回するしかないようなものとしての「不在」の意義は、脱構築批評などの流入に伴い、さらに影響力を増すこととなる。脱構築批評の影響下、言語の遊戯性という観点から小説を分析したものとして、John T. Matthews, *The Play of Faulkner's Language* (1982) などがある。Matthews の議論においてはより直接的に「喪失」の問題が取り上げられ、言語との関係から分析が試みられている。彼はデリダの議論などを参照しつつ、Bleikasten

らが問題にした「喪失」あるいは「不在」を埋めようとするフォークナー的言語の、「失敗」（とその遊戯性）にこそ焦点を当てている（73）。焦点化されるのは常に指示作用を裏切る、デリダ的な「痕跡」としての言語である。小説の構造あるいは叙述形式の分析から、それが前景化する言語の「失敗」あるいは表象の不可能性へと議論の方向が向けられるようになってゆくのだ。不在あるいは喪失をめぐる表象と言語との関係を分析したものとしては、Gail L. Mortimer, *Faulkner's Rhetoric of Loss: A Study in Perception and Meaning* (1983) なども挙げることができる。ここではクエンティンの意識における知覚と時間の関係や、ベンジーと嗅覚との直接的な連結などが詳細に分析されている。形式と言語を巡ってなされた研究としては、Donald M. Kartiganer, *The Fragile Thread: The Meaning of Form in Faulkner's Novels* (1979) も同様の方向性にあると言える。Kartiganer は、フォークナー作品における“form”についての分析を主眼としたこの著書を『響きと怒り』の章から始めている。彼もまた四つのナラティヴの関係性を分析することを主眼として議論を展開する。焦点とされるのは現実あるいは「真実」と言語との関係であり、独立した四つの章が「先行するものを打ち消し」あう中に「意味のない総計」として形成される「真実」というものの価値を前景化する（7）。ここで注目しておきたいのが、言語と身体を巡る関係についても彼が言及していることだ。ベンジーのナラティヴにおいては「知覚が意識よりも優先され」ている（8）。結果として彼の生が持つ“the power of its rawness”が前景化されることとなり、そこには解釈や秩序付けによって失われてしまう“pure presence”が現出するのである（11）。一方で“words have a substance more real than bodies”と信じるクエンティンは、「耐え難い現実を言葉によって変えよう」とする（13）。身体とは、ベンジーにとって「純粋な経験」として生きられるものである一方、クエンティンにとっては常に言語（あるいは象徴）によって包摂しようと試みられ、その物質性は否定されるべきものなのである。

こうした文脈において身体は、初期批評が問題とした次元とは異なった位置づけを与えられているように思われる。「現実」に対する叙述のための媒体であった身体は、トラウマティックな「不在」をめぐる叙述＝言語化の失敗によって、むしろ異物としての側面を前景化させる。身体は言語化を阻害するものとして、その対照項である「現実」の側に置かれていると言ってよいだろう。そうして表象不可能性としてのキャディを巡る三人の兄弟の（あるいは第四章で超越的パースペクティヴとして姿を現す作家の）態度が批評の関心の対象として問題化される。

ここで本稿が整理したような言語によるある種の「迂回」と、そのトラウマティックな核との関係を改めて明確化したのが、Noel Polk, “Trying Not to Say: A Primer on the Language of *The Sound and the Fury*” (1993) である。Polk は、“We have access to their pain largely through what they *don't* say, and also through the visual forms of the language in which Faulkner has inscribed their thoughts and feelings on paper” (143) という見通しから四つの語りの問題を分析している。

感情に言語的にアクセスできないために「言えない」ベンジー (146)、一つの記憶の周りをぐるぐると“hover”するクエンティンの語り (154)、去勢と死を恐れ、強い「父」を望むジェイソン (167)、そして「声」で圧倒し、聴衆を“a direct, unfiltered experience of that which is being signified” (173) へと至らせるシーゴグ牧師の姿などが、「言語とその外側」という枠組みから導き出されている。

3. 女性の身体、黒人の身体

これまで批評状況において問題化されたのは、小説のナラティヴを混乱させる、あるトラウマティックで表象不可能な経験であり、その中心は一言で言えば、キャディ (の処女喪失および結婚) に他ならない。そうした状況から、90年代に入るにつれて、批評は新たな局面へと移ってゆくことになる。90年代に出現し始める批評の傾向として特徴的なのはジェンダー、歴史、人種といった批評的観点の導入である。中でもジェンダー批評の発展と連動し、その影響下から『響きと怒り』を読み直すものは、影響力を増している。大きく問題化されるのは女性の表象についてである。特に三人の兄弟のオブセッションの源であったキャディの存在や、排除された母としてのキャロライン・コンプソンが取り上げられ、それまで表象不可能性として扱われてきた女性の身体性を改めて語り直すという姿勢への転換が見られる。

Minorse C. Gwin は *The Feminine and Faulkner* (1990) の議論において、小説のエコノミーから排除された不在の中心としてキャディを扱ってきた批評に疑義を呈し、イリガライなどを参照しながらキャディを位置付け直す。Gwin によればキャディは、女性の主体として小説のエコノミーにおいては沈黙を強いられながらも、三人の兄弟の意識に巣食う男性的言説を越えて、彼らの意識を攪乱する存在となっているのである (46)。あるいは「母」という視点から『響きと怒り』における女性を分析したのが Philip M. Weinstein が *Faulkner's Subject: A Cosmos No One Owns* (1992) で行った議論である。そこで問題とされるのは南部白人女性としてキャロライン・コンプソンが被る抑圧である。キャロラインが育った南部的風土は、彼女に“woman is either a lady or not” (Faulkner 69) という信念を持たせた。そのために彼女には、「淑女」であることと「母」であることを両立することが許されていない。女性としての身体性を抑圧し、ただ子孫を養うことでしか母として振る舞うことができないのだ (Weinstein 33)。そして Weinstein は、この小説において“The domain of the father is the domain of the Spirit”であり、“The domain of the mother, on the other hand, is the domain of the unfissured, prelinguistic body” (33) であると述べる。前景化されるのは、“prelinguistic body”としての女性の身体であり、それは南部社会においてつねに抑圧の対象である。

Doreen Fowler は“‘Little Sister Death’: *The Sound and the Fury* and the Denied Unconscious” (1994) において、Bleikasten や Matthews らが検討してき

た不在の中心としてのキャディの位置づけを確認しつつ、それらと対照させる形で、三人の兄弟の語り手について精神分析的枠組みから示唆に富む分析を試みている。キャディが体現している完全なる母（ファリック・マザー）のイメージは、男性の主体に欠如の感覚を与え、そのアイデンティティを脅かす。それに対処するため、ジェイソンやクエンティンは、代理母としてキャディとの一体化を望みつつ、彼らの感じる欠如の具現化としてキャディの存在を制御し、距離を保たねばならない。こうして彼らはキャディとの一体化を望みつつもその存在を抑圧したがるという二つの相反する欲望を抱くことになる。それはラカンの枠組みで言うところの想像界と象徴界に対応する。象徴界に参入し、主体となるためには、キャディを不在あるいは空虚な記号として扱わねばならないが、一方でキャディとの想像的な同一化を達成するためには、「他者と溶け合い、存在することをやめねばならない」のだ（5）。後者の欲望を直接に体現するベンジーは、自我を持たず、彼の「身体ですらも、何の意志もなく独立して動く関連づけられていない断片の寄せ集めのように見えてくる」（5）。一方で主体として自我の境界を保ちたいジェイソンとクエンティンは、キャディを統御し、秩序の中に組み入れておこうともがくのである。

こうした女性の身体性を問題化する読み直しの動きは近年にも引き継がれており、Kristin Fujie の “All Mixed Up: Female Sexuality and Race in *The Sound and the Fury*” (2010) は、本稿の文脈において示唆的な議論を提出している。Fujie は、小説においてクエンティンが恐れる女性の身体性、あるいはその “materiality” が、人種という問題に接続されることを論証している。クエンティンが月経に象徴されるようなキャディの身体性から感じ取る外傷性が、人種への問いを誘発するのだ（126-27）。Fujie は、こうした女性への身体への恐れあるいは「パニック」から人種的な問いへ、という動機付けをフォークナーのキャリアへも適用し、中期から後期に至る作品群を見通す研究を展望している。

このように、攪乱的な「身体」は常に女性へと仮託され、その不安が人種的な問いを誘発する。とは言え人種問題という観点から言えば、『響きと怒り』において描出される黒人はまだステレオタイプの戯画化されたものという域を出ず、本格的に黒人の身体が異種混淆というスキャンダラスな形で前景化されるには、『八月の光』、『アブサロム、アブサロム！』といった以後の小説を待たねばならない。しかし、それでもこの小説の中に人種に対する意識の萌芽を読み取る議論は存在する。

この小説の黒人キャラクターを問題化する批評として、Thadious M. Davis の *Faulkner's "Negro": Art and the Southern Context* (1983) における議論がある。そこで問題にされているのは『響きと怒り』における黒人一家、ギブソン家を中心にした黒人の表象の意味についてである。Davis によれば、この小説において黒人は、白人一家コンプソン家の参照項としての意味を担っている。ディルシーら黒人たちの精神的な充足や安定は、崩壊してゆくコンプソン家と対置されることで白人の不安を際立たせるのだ。ディルシーを中心に据えた第四章の小説的機能も問題にされ、ディルシーの

知覚がフォークナーにとって“creative center”としての役割を果たしているということも指摘されている。読者が小説を再構築するのはディルシーの“vision”を通じてなのであり、そうした意味で、ディルシーは半ば小説的機能として要請されているのだ。ディルシーは“negro world”を通じてしか現実と接続していない。このような議論においては、黒人は白人イデオロギーのある種の投影として分析される。

しかし本稿の文脈で言えば、黒人キャラクターの知覚は、単にナラティヴを相対化するだけの役割には留まらない。ディルシーがベンジーを評して“He smell hit”と述べる(90)ことが象徴的に示すように、概して黒人のキャラクターは、知覚に対して非常に共感的である。これは、後述するが、第四章におけるシーゴグ牧師の演説で強調される、「声」の価値などとも相まって重要な論点となる。

人種とイデオロギーの分析をさらに精緻化させた議論として、Eric Sandquist の *Faulkner: The House Divided* (1983) はニュー・ヒストリシズムの流れを汲みつつ、「人種」への意識の深化という観点からフォークナーの中期から後期作品を見通している。Sandquist は、フォークナーのキャリアを「小説的形式への問い」に捧げられた時期と、そうして探求した形式を用いて(具体的には『八月の光』において中心の主題として現れ、『アブサロム、アブサロム!』において頂点に達するような)人種間の葛藤や異種混淆の問題を探求してゆく時期とに二分する(5)。彼はフォークナー作品全体に通底するテーマとの関連から『響きと怒り』を位置づけようとする構想の中で、後期作品において顕在化する異種混淆への恐れをはじめとする人種的葛藤というテーマ(それは“the lost dimension of Southern experience”とまとめられている)を無意識的な領域に内在させたものとして『響きと怒り』を捉え直すのである(26)。

では南部イデオロギーにおいて抑圧された存在を表象することに対する作家の態度はどのようになっているか。平石貴樹『メランコリック・デザイン』(1994)は、「フォークナーにおいてはロマンティシズムこそが歴史の場、すなわち個人的なものと社会的なものがさまざまに出会い、交流する場だった」(13)という認識の下、詩人としての出発から『響きと怒り』にいたるフォークナーの初期作品における、ロマンティストとしての主題的發展を精査したものであるが、その中で女性や黒人の表象に関するフォークナーの自意識への言及がなされている。そこでは『埃にまみれた旗』のミス・ジェニーや『響きと怒り』のディルシーといったキャラクターに対する作家の一種特別な肩入れが取り上げられ、「差別する白人男性としてのフォークナーが、賞賛をこめて差別される女性たちや黒人たちの観点を想像上とることが、かれが分身的な白人男性の主人公から作者として超越するための必須手段だった」と述べられている(195)。

4. 文化の焦点としての身体——メディア論、文化論

ここでひとまず、これまで確認した研究史における身体という問題について整理しておく。まず、小説の語りを構造的に分析するとき、そこで中心となるのは、「意識の流

れ」や断片化を特徴とするそれぞれのナラティヴが持つ意味であり、その小説的効果の分析である。本稿が主題としている身体性は二つの側面を持つものとして整理されたが、こうした時期における批評が問題にするのは、その一つ目の側面、すなわち主体と世界との接触の境目としてのあり方であった。それぞれのナラティヴの主体が世界を受容するのは身体を通してであり、ナラティヴ分析は嗅覚、触覚をはじめとする知覚を前景化させる。そうした分析は、ベンジーやクエンティンやジェイソンが（そして何よりも作家が）直接に表象するのをためらうような「現実」というものに対するナラティヴの不可能性を浮かび上がらせる。そして、表象を拒絶するような「現実」の核に、キャディの処女喪失が見出されるのである。したがって、キャディに触れられることでベンジーが落ち着き、そこに木の匂いを嗅ぎ取ったり、クエンティンがスイカズラの匂いを契機としてキャディの記憶を呼び起こしたりするように、彼らの身体に訪れる知覚というのは、およそキャディと結びつき、ある種のトラウマティックで表象不可能な記憶と結びつくこととなる。

表象不可能な経験が身体へと結びつくことを通して、身体性は、ジェイソンやクエンティンが意識的、無意識的に内面化している白人男性的イデオロギーを攪乱するものとして前景化してくることとなる。そして、攪乱的な身体は、女性へと仮託される。構造主義から精神分析、脱構築へと至る批評の手づきが表象の外部、その不可能性として見出したもの、あるいは精神分析的批評が「不在の中心」として位置づけるものは、何よりもキャディの「身体」なのである。ここでもう一つの側面、制御不可能なものとしての、身体の物質性という側面が問題化される。それは言語による表象を拒絶するものであり、言語化の「失敗」において前景化するものである。ジェンダー・スタディーズを経由した批評が小説の分析において新たな焦点を当てるのが女性の身体であるが、それらはとくにクエンティンのナラティヴにとって、表象不可能な外傷性として、現前し続けることとなる。

さて、以上のように一方では叙述の基礎、他方では攪乱的なものとして扱われてきた身体は、現在に至って、新たな焦点を当てられる。21世紀に入ると、興隆を見せてきたメディア論や文化論の視点からフォークナーを読み直すものが出現し始める。本稿の文脈においてそれが重要なのは、こうした新たな読みの提示において焦点が当たるのが、文化の焦点としての身体だからである。Katherine R. Henninger, “Faulkner, Photography, and a Regional Ethics of Form” (2007) は、表象を行う際の形式の選択に付随する文化的なポリティクスという観点から、フォークナー作品を読み解いている。そこで分析の焦点とされるのは視覚文化 (visual culture) / 口頭文化 (oral culture) という枠組みであり、フォークナーの写真への関心の高さなどを引きつつ、従来口頭文化として扱われてきた南部社会にあって口頭性と視覚性（ここではすなわち印刷や出版ということだが）の間に緊張関係をもたらしものとしてフォークナー作品を位置づけなおしている (124)。そうした考察の中で Henninger は『響きと怒り』にも触れ、キャディの “pictured state” (128) に言及している。また、Julian Murphet

は“New Media Ecology”（2015）において、メディア論的観点から、メディアの発展とモダニズムとしてのフォークナー作品とを対照させて論じる。フォークナーが小説を書いた時代は、複製芸術の浸透やフォーディズムの形成に伴って、作家の権威の失墜した時代である。そうした時代において他のメディアが描けないものとして、「情動」の価値が確認され、そうした情動がナラティヴを超えて奔出するところにフォークナーをはじめとするモダニズムの可能性を見通している（22）。

こうした研究の潮流のなかで、情動理論の発展などとも相まって文学研究における身体的重要性は高まっており、本稿も基本的にはこれらの流れに位置するものである。しかし一方で、小説分析と文化論およびメディア論との接続は、分析の焦点を広く設定するがゆえに、具体的なテキスト上の表現手法に対する十分な分析を欠く、という問題も指摘することができる。文化（あるいは社会）と身体とが交錯する時、それは何よりもまず個人の知覚や身体感覚というレベルにおいて起こるものなのではないだろうか。したがって、これらの批評が展望する文化論からの読み直しに対して、本稿が見定めたいのは、「南部」あるいはイデオロギーと身体とのより直接的な結びつきであり、その具体的なテキスト上への表れである。

5. 社会と身体——血

最後に、これまでの整理を踏まえ、いくつか問題となる論点を指摘しておきたい。まず、繰り返しになるが、『響きと怒り』の登場人物のなかで、それぞれ性質は違うものの知覚という意味において最も身体性が際立っているのがベンジーとクエンティンであることは疑いえない。中でも身体の問題を考察する際に最も多く問題にされるのはベンジーのそれだろう。彼がBleikastenによって“*There is no central I*”と形容されていることは先に触れたが、他にも幾人もの論者によってベンジーは「カメラ」にたとえられている。そうした比喩に込められる意味とは、主体性の不在だ。敢えて主体を精神と身体とに弁別するならば、彼には精神というものが存在しない、というよりその二つの境が存在しないと言える²。逆に、精神しか存在しないとも言えるクエンティンの知覚は、ベンジーのものとは少し異なる。彼が嗅ぎとるスイカズラの匂いは、嗅覚という意味ではベンジーと共通するが、それはキャディの象徴としての意味に終始するのであり、それ以上の情報を持たない。彼の知覚には「時」の象徴としての「音」も加わっている。時計の音に対するクエンティンの拒絶は徹底している。彼にとって「音」もまた象徴的なものとしてしか知覚されないのである。彼にとって嗅覚はキャディであり、聴覚は時間である。

そうした二人の兄弟に対し、ジェイソンは比較的現実的なキャラクターとして整理されていた。これは先に舌津が触れていたようにベンジーやクエンティンが嗅覚に敏感である一方、ジェイソンのナラティヴにおいて嗅覚がほとんど意識されず、あえて取り上げるなら（ロレインとの情事をはじめとする）触覚が最も特徴的であることなども対

応している。しかし、ジェイソンのナラティブにおいて身体は、また別の形で社会に結びついたものとして前景化することとなる。男と車で走り去ってゆく姪のクエンティンを見て激昂しながら **“Like I say blood always tells. If you’ve got blood like that in you, you’ll do anything”** (238) と漏らすように、ジェイソンのナラティブにおいて頻出する身体表象は、「血」である。それは身体の中にありながら、人間と家族、土地、歴史とを結びつけるものとなる。「現実」にこだわり、自分の熟知できるものしか認めないジェイソンの意識において、身体は別の形で回帰してくるのである。ここに現れる身体観は二つの側面を持っている。一方でジェイソンが **“I’m a man, I can stand it, it’s my own flesh and blood and I’d like to see the color of the man’s eyes that would speak to disrespectful of any woman that was my own friend”** (246) とアールに食って掛かる台詞に登場するように、それは個人の一つの単位となり、主体によって所有されるものである。一方母キャロラインがジェイソンに対し、しきりに姪クエンティンが **“your own flesh and blood”** (120) であると説くことは別の次元の意味を暗示する。そこでは「血」によって、個人の身体が超越され、結び付けられるさまであり、その先には、家族があり、土地がある、と言ってよいだろう。こうした意識は、先に引いたキャロラインにも通底している。なるほどこれらは普段の生活において、直接的に「身体」の感覚として意識されるものとは言えないだろう。しかし、例えば姪クエンティンを追跡する中で彼が感じる頭痛、そして彼の頭の中に響く脈動 (302) などにおいて、ジェイソンの「血」は彼の身体に明確に異物の感覚として現れ、影響を及ぼし、さらに彼の意識に混乱をもたらすのである。こうした意味において、自己の中に自己でないものを抱えているという感覚は、宿命を引き受けようとしたり、それに反発したりする広く「南部」の身体感覚と繋がっている、と言えるだろう。彼らにとって社会とは自己の内にも存在するものなのであり、それは彼らの身体を通して顕在化するのである。

さらに、個人が超越されるという身体感覚が別の形で表れるのが、4章におけるシーゴグ牧師の演説であろう。Polkの議論でも触れられているが、シーゴグの演説は、**“With his body he seemed to feed the voice that, succubus like, fleshed its teeth in him”** (294) といったように、「声」を中心としてきわめて直接的にその身体性を強調されている。黒人に対するある種のステレオタイプ化の範囲を出ているわけでは決してないものの、この演説行為は言語を超えたコミュニケーションを可能にし (**“beyond the need for words”** [294])、聴衆の身体にすらある種の反応を引き起こす。実際、演説を聞いたディルシーは涙を流し、「全てを見た」という気にさせられている。こうして、ジェイソンにとって内なる「異物」の感覚として知覚されていた個人の身体の超越は、こうした行為においてよりポジティブな「連帯」の感覚として描き出されているのだ。

さて、本稿は、『響きと怒り』の研究史を概観しつつ、そこに現れる身体表象について問題化し、新たな研究を展望するものであった。フォークナーは『響きと怒り』の完

成以降、南部社会に対する問題意識を増大させ、小説には、より直接的に女性が、黒人が登場していくことになる。それに伴って、一見すると主題としての「イデオロギー」がより存在感を増し、『響きと怒り』ほどあからさまな形で知覚や身体というものが小説を駆動する要素として扱われることは少なくなっていくように見えるかもしれない。しかし、本稿がここで行った問題提起は、やはり中期から後期に至るキャリアにおいても依然として重要である。『響きと怒り』以降のフォークナーの作品群は、響きと怒りに対するある種の自己批評であると言えるが、そこでも依然として身体表象は重要であり続ける。『死の床に横たわりて』（1930）はアディ・バンドレンという一人の女性の死体を埋葬することを巡って展開されるものであるし、人種問題が主題の中心に据えられた『八月の光』（1932）においてジョー・クリスマスの物語の中心にあるのは、彼の肌の色が（そして血統が）白人／黒人のどちらにも決定できないことである。小説において社会的な意識が深められていったとしても、フォークナーにとってそれが社会と身体の結びつきに関する探究であることは変わりがないのである。『響きと怒り』の分析において見出された知見を経ることで、その後の身体表象の変遷を総合的に記述することが可能となる。そうした意味において、ここで展望する身体表象の分析は、フォークナーのキャリアを取り扱う切り口として十分な有効性を保持しうる。

注

¹ 小説出版直後の批評状況については、Noel Polk, “Introduction” が簡潔にまとめている。

² ベンジーに主体性を認めないという批評的な立場を問題化し、そこに何らかの主体性を読み取ろうとする Richard Godden, “Quentin Compson, Tyrranean Vase or Crucible of Race?” (1993) のような立場も存在する。彼はポール・リクルの “pre-plot” の概念を参照しつつ、キャディを求めるベンジーのふるまいをそうした “plotting” への参入として位置づけている (102)。

引用文献

- Bleikasten, André. *The Most Splendid Failure: Faulkner's The Sound and the Fury*. Indiana UP, 1976.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. Yale UP, 1963.
- Davis, Thadious M. *Faulkner's "Negro": Art and the Southern Context*. Louisiana State UP, 1983.
- Faulkner, William. *The Sound and the Fury*. Vintage, 1990.
- Fowler, Doreen. “‘Little Sister Death’: *The Sound and the Fury* and the Denied Unconscious.” *Faulkner and Psychology*. edited by Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie, UP of Mississippi, 1994, pp. 3-20.

- Fujie, Kristin. "All Mixed Up: Female Sexuality and Race in *The Sound and the Fury*." *Faulkner's Sexualities*. edited by Annette Trefzer and Ann J. Abadie, UP of Mississippi, 2010, pp. 115-30.
- Godden, Richard. "Quentin Compson, Tyrrhenian Vase or Crucible of Race?" *The New Essays on Faulkner's The Sound and the Fury*. edited by Noel Polk, Cambridge UP, 1993, pp. 99-137.
- Gwin, Minorse C. *The Feminine and Faulkner: Reading (Beyond) Sexual Difference*. U of Tennessee P, 1990.
- Irwin, John T. *Doubling and Incest/Repetition and Revenge: A Speculative Reading of Faulkner*. Johns Hopkins UP, 1975.
- Iser, Wolfgang. *The Implied Reader: Patterns of Communication in Prose Fiction from Bunyan to Beckett*. Johns Hopkins UP, 1974.
- Murphet, Julian. "New Media Ecology." *The New Cambridge Companion to William Faulkner*. edited by John T. Matthews, Cambridge UP, 2015, pp. 14-28.
- Kartiganer, Donald M. *The Fragile Thread: The Meaning of Form in Faulkner's Novels*. U of Massachusetts P, 1979.
- Henninger, Katherine R. "Faulkner, Photography, and a Regional Ethics of Form." *Faulkner and Material Culture*. edited by Joseph R. Urgo and Ann J. Abadie, UP of Mississippi, 2007, pp. 121-38.
- Matthews, John T. *The Play of Faulkner's Language*. Cornell UP, 1982.
- Millgate, Michael. *The Achievement of William Faulkner*. Constable, 1965.
- Mortimer, Gail L. *Faulkner's Rhetoric of Loss: A Study in Perception and Meaning*. U of Texas P, 1983.
- Polk, Noel. "Introduction." *The New Essays on Faulkner's The Sound and the Fury*. edited by Noel Polk, Cambridge UP, 1993, pp. 1-21.
- . "Trying Not to Say: A Primer on the Language of *The Sound and the Fury*." *The New Essays on Faulkner's The Sound and the Fury*. edited by Noel Polk, Cambridge UP, 1993, pp. 139-75.
- Sandquist, Eric J. *Faulkner: The House Divided*. Johns Hopkins UP, 1983.
- Vickery, Olga W. "The Sound and The Fury.: A Study in Perspective." *PMLA*, vol. 69, no. 5, 1954, pp. 1017-37.
- Weinstein, Philip M. *Faulkner's Subject: A Cosmos No One Owns*. Cambridge UP, 1992.
- 舌津智之「嗅覚の彼岸——『響きと怒り』における欲望と身体」『フォークナー』第14号(2012)、24-36頁。
- 田中敬子『フォークナーの前期作品研究——身体と言語』開文社出版、2002年。
- 平石貴樹『メランコリック デザイン——フォークナー初期作品の構想』南雲堂、1993年。